令和４年７月31日(日)　　窯組　愛宕山権現・津島様神事

今年も新型コロナウイルスの影響で夏祭りは中止され、神事のみ行われました。

周辺の清掃作業

祭壇の設置

四方に竹を設置

注連縄(しめなわ)及び紙垂(しで)を取り付け

準備完了

秋葉様・愛宕権現様神事　修祓

修祓

祝詞奏上

祭司 玉串奉奠

町内会長玉串奉奠

祭壇を津島様に移し津島様神事　修祓

祭司 玉串奉奠

町内会長玉串奉奠

祭司挨拶

以下 配布された文書全文

窯組とお祭り

【窯組の歴史】

美濃国土岐郡大富村は、往古より村内が下郷、上郷、窯郷の三郷に分かれ、上組・下組・窯組とも呼んでいた。

大富村は、東は定林寺と接し、西は久尻村と接し、南は土岐川(当時の土岐川は、現在より北側を流れていた。)を越えて高山村、浅野村に接し、北は山林を背にして、可児郡美佐野村と山林続きで接していた。

現在の窯組は、当時の窯郷(窯組)の中心に位置している。

此の窯郷(窯組)の内に、江戸時代前期頃より登り窯が西窯第二町内会の裏山(旧称とりのこ山)の西及び南の斜面(今は住宅化)に造られて、その一部分は大正の終わり頃まで焼かれていた。当時、燃料はすべて薪であった。

その窯を昔は大富竈と言っていた。何故大富をつけて呼ぶのかわからなかった。

窯組の歴史は、終戦後、東窯(灶)町、西窯(灶)町が発足し、その後、西窯と東窯から中窯が独立、その後仲森町と北山町が分離、その後西窯町が第一町と第二町に分離、北山第二町も独立して、現在の窯組は、東案・中窯・西窯第一・西窯第二の四町とされた。

※「かま」の字の変遷、古文書では「竈」、大正の中頃から昭和の中頃までは「釜」を使用、大戦後は一時「灶」を使用したが、その後「窯」の字に落ち着いた。

【窯組と秋葉神社・愛宕山権現と津島神社】

秋葉神社と愛宕山権現は、共に火防(ひぶ)せの神であり村を見降ろす小高い山の中腹(北山二町に抜ける中央道のトンネルを潜って山道を約 200m 進んで、向かって右側の山の斜面)に、村が火災に遭わないように祀られていた。

旧東案と旧西窯の里人が一緒に秋葉神社と愛宕山権現に参向しお祭り(周辺の清掃、お供えをして神事)をおこない、その後、両里人が秋葉神社の大神への感謝を籠めて広場・道路若しくは旧大富窯倶楽部(現:泉中窯町 2 丁目 16 番地)で夏祭りの盆踊り相撲を行っていた。

その後、区画整理を機会に秋葉神社と愛宕山権現は、山からおろされ、庚申堂の北側(津島神社の西側)に並んで祀られることとなった。

津島神社は、疫病が村に入らぬように旧東窯(現:延命寺の北東隅辺り)と旧西窯(現:泉西窯町 3 丁目 53 番地・同 56 番地の南辺り)それぞれに祀られ、それぞれでお祭り(周辺の清掃、神前竹の簾を新調し麦わらの屋根を葺き替えと、お供えをして神事)が行われていた。 その後、区画整理により二つの津島神社を合祀して庚申堂の北側に祀られることとなった。

※当時の窯組全体の中心は庚申堂(区画整理前は現在地のやや東に位置)であった。(現在も 同様)区画整理により、道路状況等が大きく変わったため、おおよその現在地を示した、当時を 偲ぶものは何も残っていない。

・「窯の昔と今」郷土歴史研究家故田中鈴夫先生著小冊子参照 ・「ふるさと泉」平成元年 10 月 20 日発行編集委員長故田中鈴夫先生参照 ・加藤隆一様(泉東窯町居住)よりお聞きした内容含む。